

平成26年度 第1回 企画展

常滑の原始・古代 展

平成26年度とこなめ陶の森資料館、第1回目の企画展は知多半島で常滑焼が焼かれる以前の原始・古代をテーマにしました。常滑や全国的に焼き物で有名ですが、私たちの地元に残された祖先の生活を改めて見つめなおすことが、今回の企画展の趣旨です。

原始時代とはまだ文字が使用される前の時代で、日本では旧石器時代、縄文時代、弥生時代と呼ばれる頃です。常滑市内には旧石器時代の遺跡はまだ発見されていませんが、縄文時代の貝塚、弥生時代の遺跡が見つかっています。

縄文時代はおよそ15000年前に始まります。縄文時代は「竪穴住居（たてあなじゅうきょ）」がつくられたことから定住生活が始まり、最初の焼き物「縄文土器」が発明された時代です。縄文土器による煮炊きの開始は、これまで食べることができなかったドングリなどの植物質食料や貝類の食用を可能にしました。その結果、日本全国の海岸部を中心に多数の貝塚が形成されます。

常滑市内には縄文時代中期（約5000年前）の石瀬（いしぜ）貝塚が発見されています。石瀬貝塚は昭和31～33年に発掘調査がおこなわれ、市の史跡に指定されています。この遺跡は標高約10mで、大野谷に面した南側の段丘に位置しています。発掘調査によって、煮炊きに使用された土器、狩りに使用された石器、縄文人の骨、アサリやハマグリなどの貝、シカやイノシシなどの獣骨など、知多半島の縄文時代の生活を考える上で、重要な資料が多数発見されました。なかでも復元されている深鉢形土器は「石瀬型」と呼称され、縄文時代中期終末の標識資料となっています。

縄文時代が終わると、コメ作りや青銅器の使用が始まった弥生時代を迎えます。常滑市内には山之神（やまのかみ）遺跡、椎田口（しいたぐち）遺跡、千代（ちよ）遺跡など、弥生時代中期末から後期（約2000年前から1700年前）の遺跡が発見されています。正式な発掘調査はおこなわれていませんが、壺、甕、杯、高杯などの弥生土器が出土しています。山之神遺跡では祭祀に使用されたと考えられる「磨製石剣」も発見されています。

古代は、大和朝廷によって日本国家の統一がなされた時代（3～7世紀）で、近畿地方を中心に古墳が造られた時代です。常滑市内には残念ながら古墳は見つかりませんが、当時の生活や古墳の副葬品に用いられたウツワの「須恵器（すえき）」が焼かれた窯、「新田（しんでん）古窯」（約1500年前）が見つかっています。須恵器の窯は名古屋市や春日井市にも見つかりますが、知多半島内では新田古窯が唯一の窯であり、大変貴重な遺跡です。



石瀬貝塚の深鉢形土器



山之神遺跡の短頸壺



新田古窯の杯